暮らしの中のカムィヤキ

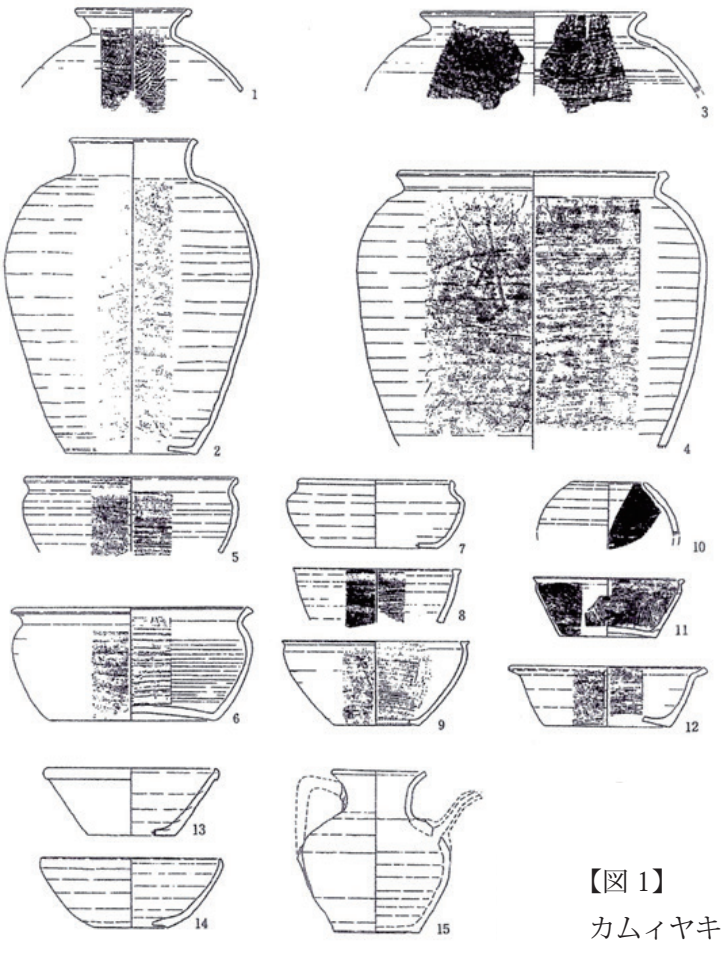
沖縄県立埋蔵文化財センター　主任
廣岡　凌

1. カムィヤキについて

カムィヤキは 11 世紀から 14 世紀の琉球列島で広く流通した焼き物で、日本の古墳時代に作られた須恵器に似ていることから「類須恵器」とも呼ばれている。作られた場所は現在の徳之島南部の伊仙町の山中にある「カムィヤキ古窯跡群」で、1983 年に発見された。表面の色は青灰色で断面が赤褐色をしているのが特徴だが、灰色やまれに赤褐色のものも確認されている。

器の種類は壺や碗、鉢や擂鉢、甕、水注（水差し）で構成され、壺が最も多く出土している【図 1】。同時期の日本の焼き物に比べると器の種類は少ないほか碗がかなり少ないため、ものを貯蔵することに重点を置いて作られたとみられる。

カムィヤキを焼いた窯は入口が狭く、内部は奥に広がりつつ傾斜している。この傾斜している部分にカムィヤキを詰めて焼いたのである【図２】。



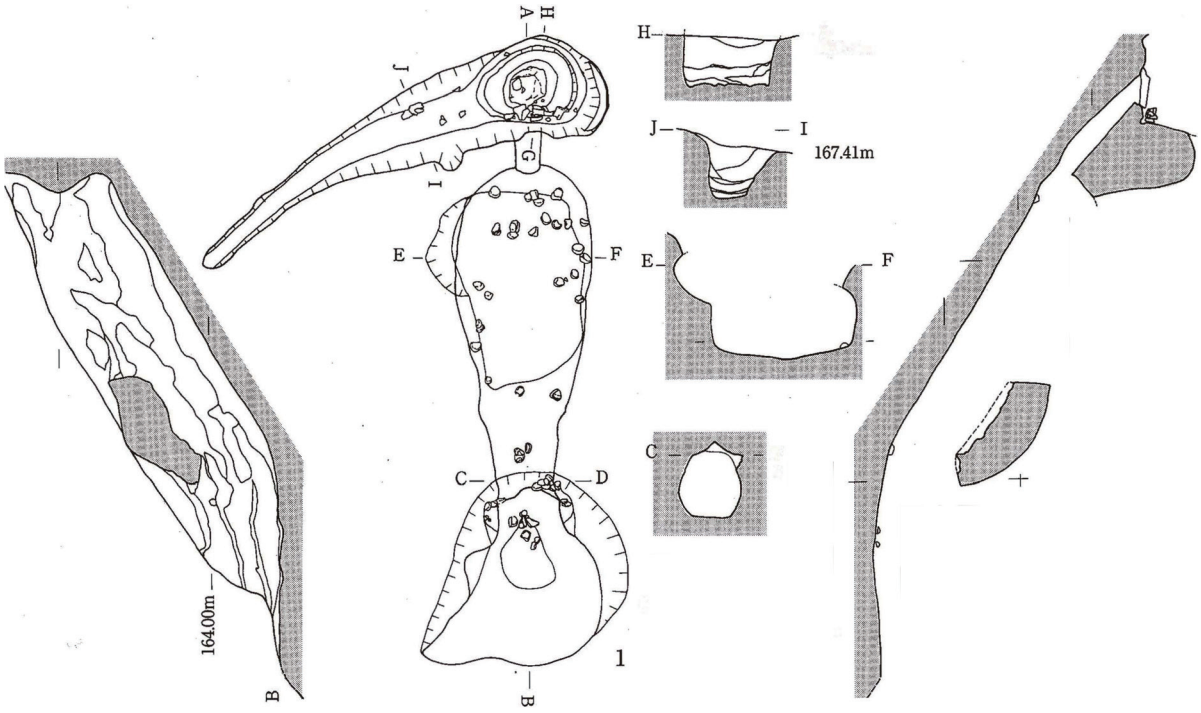
1 / 2 / 4 / 5 ～ 9 / 11 ～ 14：
伊仙町阿三亀焼支群第Ⅱ地区

3：
伊仙町伊仙東柳田支群第Ⅰ地区

10：
伊仙町伊仙平スコ支群第Ⅱ地区

15：
沖縄県宜野座村
漢名ユウギアモー遺跡表採

【図 1】
カムィヤキの器種構成（新里 2005 を一部改編）



【図２】 カムィヤキの窯（新里 2005）

２.カムィヤキの特徴

①『模様とタタキ』【図３・４】

波状文…壺の表面に棒状の工具で波状の模様を３～４周描いている。
また、波線の間に線を一周させるものが確認されている。

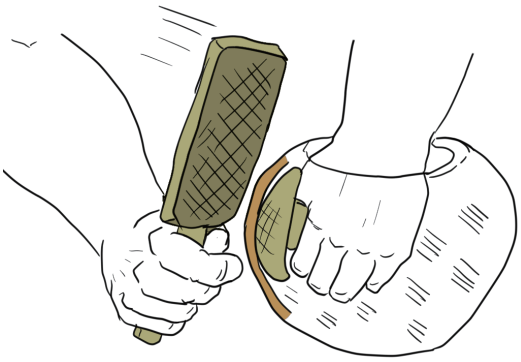
タタキ…形がある程度完成した後、内側に『当て具』と呼ばれる道具を当てて、外側を『叩き板』と呼ばれる道具で叩いて叩き締めること。
外側と内側に工具の跡が残るがその後に全体をなでているため、叩いた跡が消えることもある。

②『Ａ群とＢ群』【図５～７】
カムィヤキは作り方や焼き方、「タタキ」のやり方でＡ群とＢ群の２つに分かれる。

Ａ群…器の厚さが薄く、５㎜程の厚さが確認されている。
しっかり叩き締められた後、よく焼かれているので硬い。

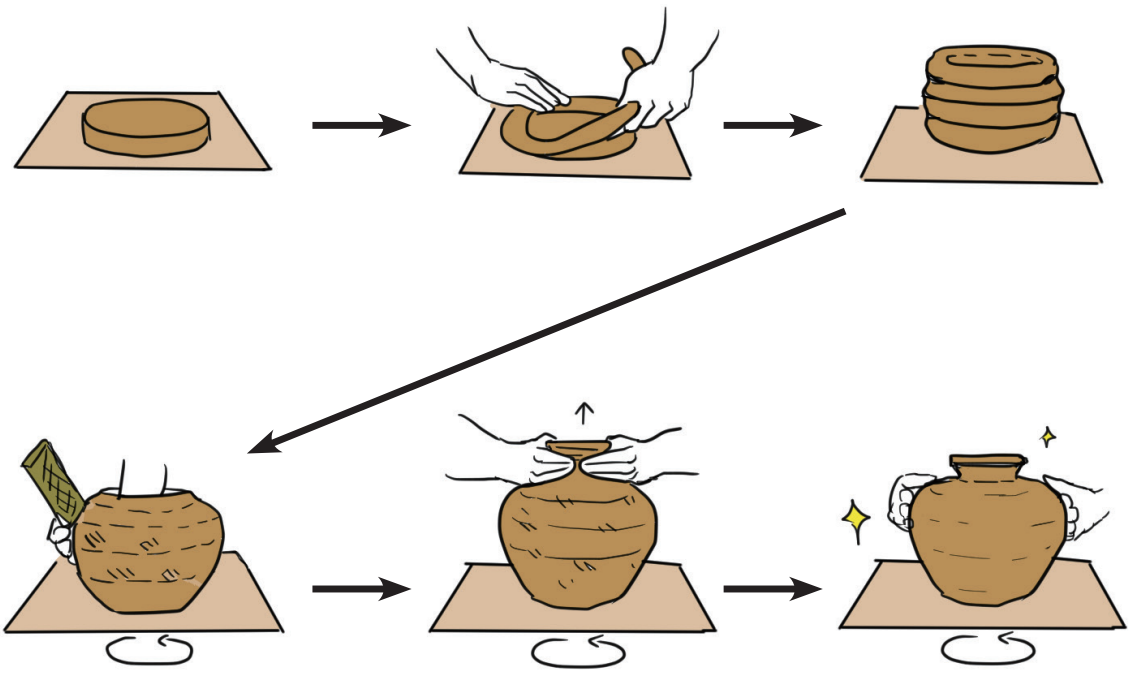
Ｂ群…器の厚さがＡ群と比べよく叩き締めてないせいかぶ厚く、焼き方が甘いため灰色っぽく少し脆い。

【図３】 波状文の描き方の想定図

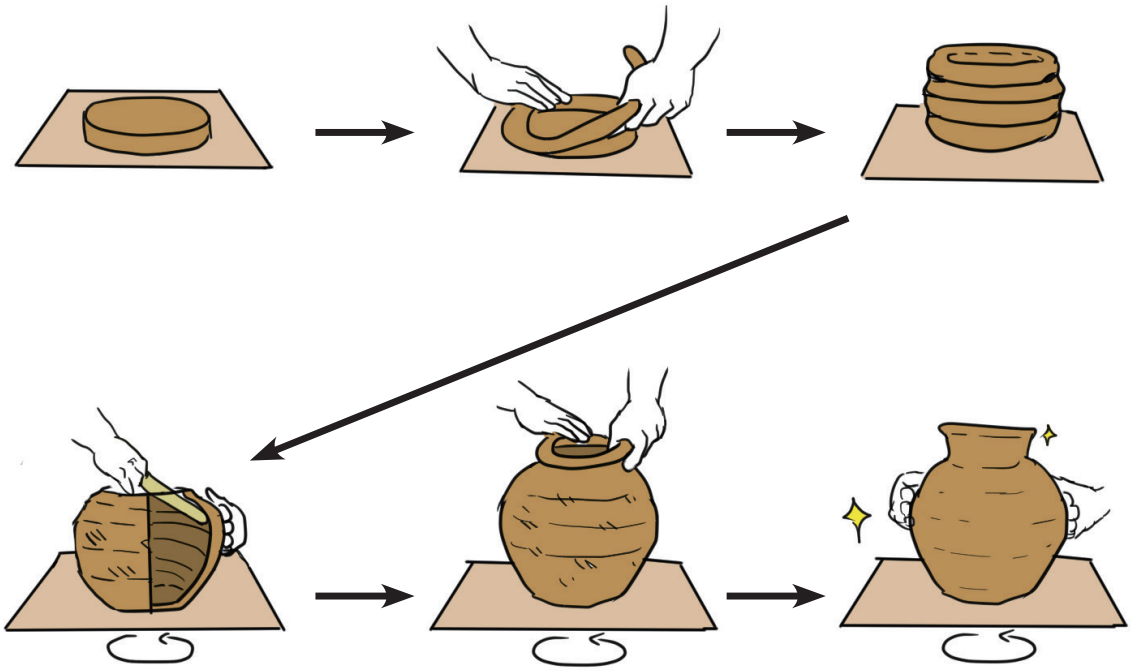


【図４】 タタキ想定図

【図５】 カムィヤキの外面・内面（新里 2005）
上段：Ａ群　左が外面 / 右が内面　　下段：Ｂ群　左が外面 / 右が内面



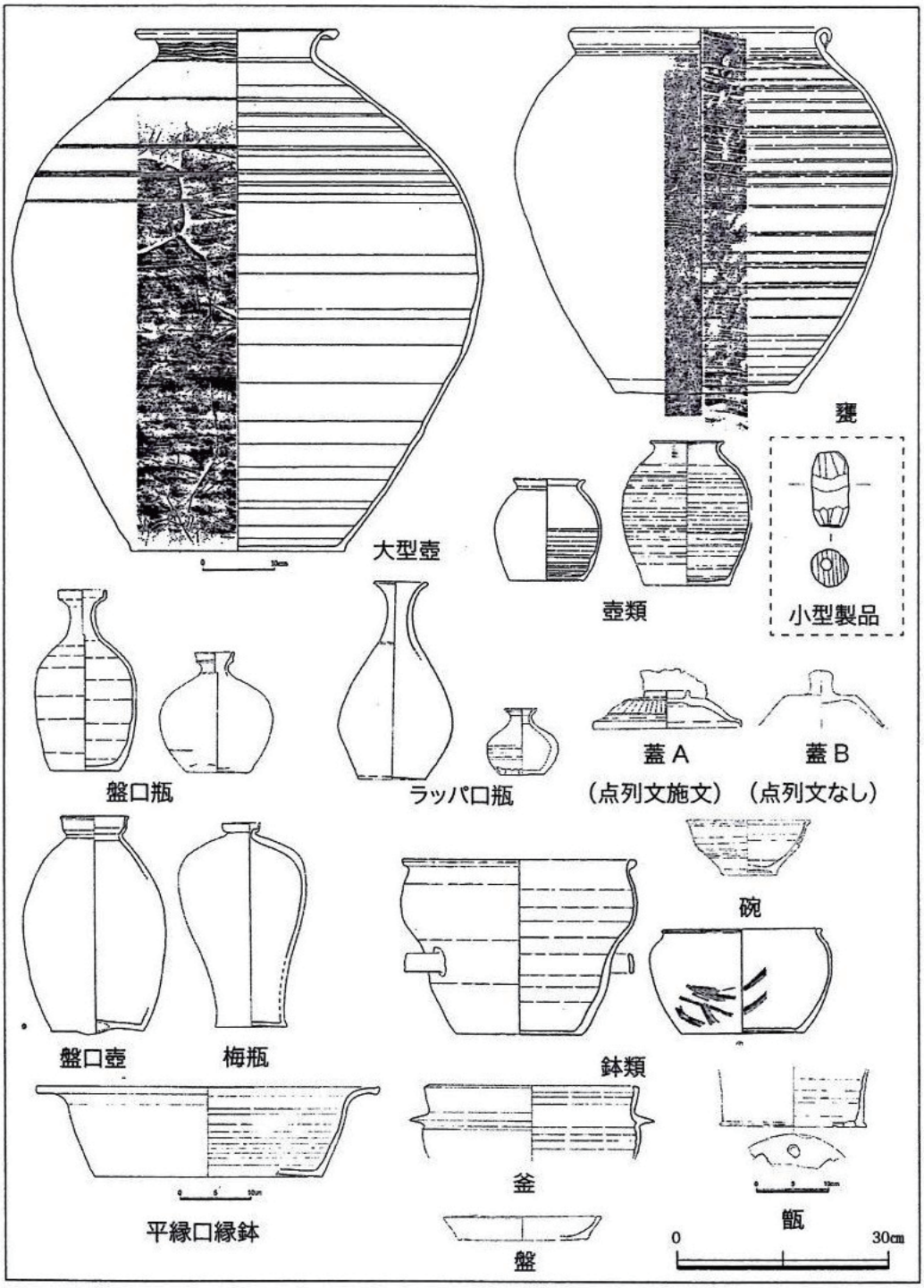
【図６】　Ａ群の時期のカムィヤキの作り方



【図７】　Ｂ群の時期のカムィヤキの作り方

3.カムィヤキのルーツはどこか

作り方や焼き方を調べてみると韓国の高麗で生産された陶器に似ており、見比べてみると壺の口の作り方や作るときに叩き締めていることなどが似ているが、一方でカムィヤキには高麗陶器にある蓋がなかったりするなど一部欠けているものがある【図８】。



【図８】 高麗陶器の器の種類（主税 2013）

4．暮らしの中のカムィヤキ

カムィヤキはグスク時代の集落とグスクの両方で出土し、グスク時代を代表する遺物の一つであり、出土遺跡は窯のある徳之島を除くと沖縄本島の遺跡で多い傾向がある。

交易の際に徳之島を含んだ奄美群島北部からの品々（米など）が入れられて琉球列島各地に流通した可能性が考えられ、小型～中型の壺が多く出土することや水が漏れにくいことから米をはじめとした穀物や液体の貯蔵に使用されたとみられる。

① 11 世紀中頃

徳之島や沖縄本島の遺跡から少量出土しており、この頃から作られていたと考えられる。長崎県産の滑石で作られた石鍋、中国産の玉縁白磁碗と共に確認されるようになり、グスク時代が始まる直前に人々の交流が盛んにおこなわれていたことがうかがえる。

② 12 ～ 13 世紀

琉球列島全域に広がり、九州（鹿児島県・熊本県・長崎県）にも流通し、沖縄では集落の遺跡でもグスクでも数多く出土するようになる。

13 世紀に入るとＢ群に置き換わっていき、九州では確認されなくなるほか、沖縄本島に出土遺跡が集中する傾向がある【図９】。

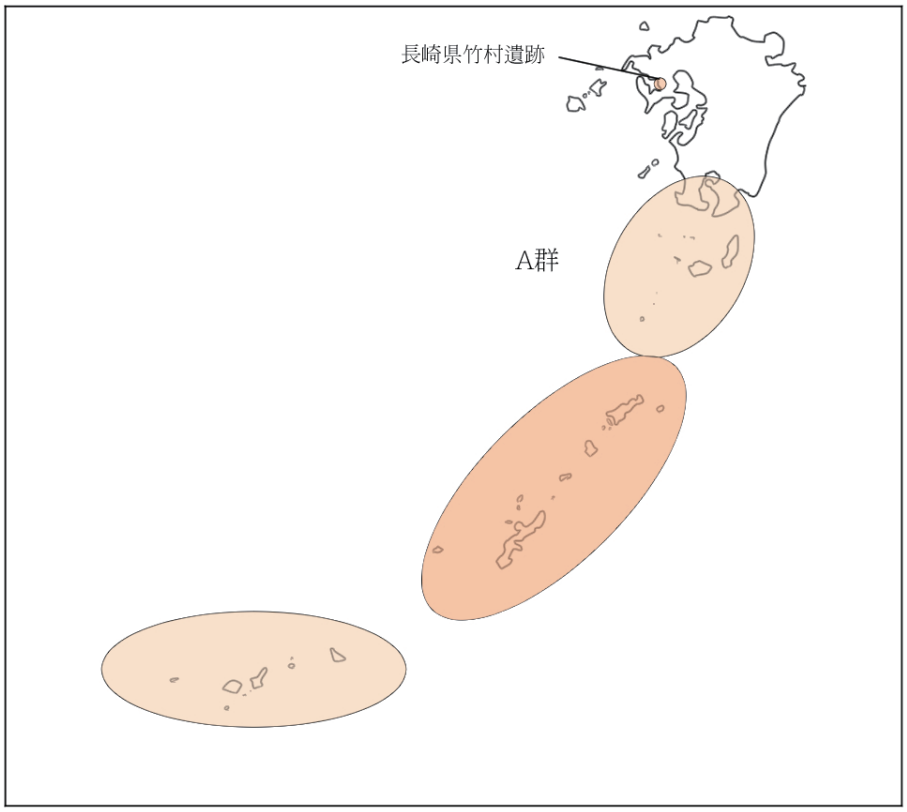
③ 14 世紀

14 世紀に入ってしばらくすると琉球列島各地の遺跡で確認されなくなり、グスクでも出土しなくなる。一説には中国産の焼き物が大量に琉球列島に入るようになったことで沖縄でも需要がなくなった可能性があるが、まだ謎が多い。

5．おわりに

カムィヤキは約 4 世紀にわたって琉球列島全域と南九州に流通し、南九州には琉球列島の品々を入れて運ばれたとみられるが、そこから先はほとんど確認されていないので、カムィヤキが必要だったのは琉球列島の人々だったと考えられる。

カムィヤキが流通した背景には中世における本土と琉球列島の関係、および交易が密接に関係していると思われ、奄美の勢力や琉球列島と交易していた南九州の商人が作らせたともいわれているがまだまだ謎の多い焼き物である。カムィヤキは琉球列島ではじめて窯で作られた焼き物であり、琉球列島全体をつないだ遺物の一つといえる。



【図９】　Ａ群とＢ群のカムィヤキの出土遺跡の分布
（色が濃い箇所がカムィヤキの出土が多く、薄い箇所は少ない）

引用・参考文献

青崎 和憲・伊藤 勝徳 編	2001	『カムィヤキ古窯跡群Ⅲ』伊仙町埋蔵文化財調査報告書 11 伊仙町教育委員会
赤司 善彦	1991	「朝鮮製無釉陶器の流入―高麗期を中心として―」『九州歴史資料館研究論集』第 16 集
赤司 善彦	1999	「徳之島カムィヤキ古窯跡採集の南島陶質土器について」『九州歴史資料館研究論集』第 24 集
安里 進	2006	「カムィヤキ (亀焼) の器種分類と器種構成の編成」『陶磁器の社会史：吉岡康暢先生古希記念論集』桂書房
池田 榮史	2004	「類須恵器と貝塚時代後期」『考古資料大観 12　貝塚時代後期文化』小学館　213 － 222 頁
池田 榮史	2005	『南島出土類須恵器の出自と分布に関する研究』平成 14 ～ 16 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (B) － (2) 研究成果報告書
池田 榮史	2006	「古代末～中世の奄美諸島－最近の考古学的成果を踏まえた展望－」『陶磁器の社会史：吉岡康暢先生古希記念論集』桂書房
伊仙町教育委員会	2010	『川嶺辻遺跡：鹿児島県大島郡伊仙町目手久：目手久地区畑地帯総合整備事業担い手育成型に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書 13
沖縄県教育庁文化課 編	1983	『稲福遺跡発掘調査報告書：上御願地区』沖縄県文化財調査報告書第 50 集
大西 智則	1996	「南島須恵器の問題点」『南日本文化』29 19-35 頁　鹿児島短期大学付属南日本文化研究所
金武 正紀	2000	「陶磁器が語るグスク時代の酒器」『琉球と東アジアの人と文化：高宮廣衛先生古希記念論集上巻』高宮廣衛先生古希記念論集刊行会
佐藤 伸二	1970	「南島の須恵器」『東洋文化』48・49 合併号　東京大学東洋文化研究所
白木原 和美	1975	「類須恵器の出自について」『熊本大学法門論業』第 1 号　熊本大学法文　学部　112 － 126 頁
城間 勇吉	2012	『グスク時代の話－琉球　12 ～ 16 世紀－』新星出版
新里 亮人	2003a	「琉球列島における窯業生産の成立と展開」『考古学研究』第 49 巻第 4 号 (通巻 196 号)75 － 95 頁
新里 亮人	2003b	「徳之島カムィヤキ古窯産製品の流通とその特徴」『先史学・考古学論究Ⅳ』龍田考古会
新里 亮人	2004	「カムィヤキ古窯の技術系譜と成立背景」『グスク文化を考える：世界遺産国際シンポジウム〈東アジアの城郭遺跡と比較して〉の記録』新人物往来社
新里 亮人 編	2005	『カムィヤキ古窯跡群Ⅳ』平成 13 年度から平成 16 年度　カムィヤキ古窯跡群発掘調査等事業　伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書 12　伊仙町教育委員会
新里 亮人	2007	「カムィヤキとカムィヤキ古窯跡群」『特集古代・中世の日本と奄美・沖縄諸島』月刊考古学ジャーナル 564 号 32-36 頁　考古学ジャーナル編集委員会編
新東 晃一・青崎 和憲 編	1985a	『カムィヤキ古窯跡群Ⅰ』伊仙町埋蔵文化財調査報告書 3　伊仙町教育委員会
新東 晃一・青崎 和憲 編	1985b	『カムィヤキ古窯跡群Ⅱ』伊仙町埋蔵文化財調査報告書 5　伊仙町教育委会
澄田 直敏・野﨑 拓司	2006	『城久遺跡群 山田中西遺跡Ⅰ』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書 8
澄田 直敏・野﨑 拓司	2008	『城久遺跡群 山田中西遺跡Ⅱ』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書 9
澄田 直敏・野﨑 拓司・宮城 良真	2011	『前畑遺跡・小ハネ遺跡』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書 11
高宮 広土・伊藤 慎二	2011	『考古学リーダー 19　先史・原史時代の琉球列島～ヒトと景観　～』六一書房
主税 英徳	2013	「高麗陶器大型壺の分類と編年－生産からみた画期―」『古文化談叢　第 70 集』九州古文化研究会
北谷町教育委員会	2009	『小堀原遺跡：キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業』北谷町文化財調査報告書第 30 集
北谷町教育委員会	2012	『小堀原遺跡：桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業』北谷町文化財調査報告書第 34 集
廣岡 凌	2016	「沖縄本島のグスク出土のカムィヤキ―流通と消費に着目して―」『南島考古』第 35 号　沖縄考古学会
松原 信之・野崎 卓司・澄田 直敏・早田 春樹	2015	『城久遺跡群総括報告書』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書 14
三島 格	1966	「南西諸島土器文化の諸問題」『考古学研究』11-1　考古学研究会
吉岡 康暢	2002	「南島の中世須恵器―中世初期環東アジア海域の陶芸交流」『国立歴史民俗博物館研究報告第 94 集』